創作少年少女小説

最後のクジラ舟

川村たかし

創作少年少女小説

最後のクジラ舟

川村たかし

実業之日本社

NDC 913
創作少年少女小説
最後のクジラ舟
川村たかし著
実業之日本社
1969年
224ページ
21.5 cm
本文10ポ活字使用
小学校上級〜中学生むき

著者の了解により
検印省略

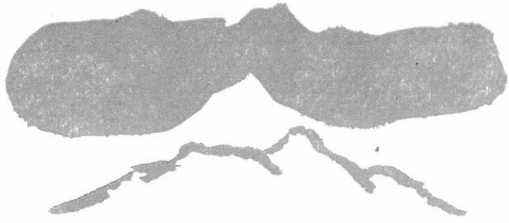
最後のクジラ舟
1969年11月10日　初版発行

著　者　川村たかし
発行者　増田義彦
印刷所　壮光舎印刷株式会社

発行所　株式会社 実業之日本社
104　東京都中央区銀座 1-3-9
TEL（562）4311　振替東京 326

定価　560 円

© Takashi Kawamura 1969. Printed in Japan



これは、明治十一年（一八七八年）の冬、和歌山県の南端にある太地港に、ほんとうにあった事件をヒントにして書いた物語である。

もくじ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一章　クジラ舟の朝　……5
第二章　あがったのろし　……31
第三章　海の王さま　……56
第四章　むらがるころし舟　……77
第五章　戦いのはてに　……106
第六章　あらし　……131
第七章　はてしない漂流（ひょうりゅう）　……155
第八章　あしたの海　……180
あとがき　……218

■この本の絵をかいた人■

赤羽末吉

第一章　クジラ舟の朝

1・モリをかつぐ少年

夜はまだ明けていない。みさきも島もひっそりとねむったままである。けれども、海はもう夜明けの準備をはじめるかのように、ほのかな星明かりの下でざわめきたっていた。

「こら、徳松よ。はよう起きんかい。」

母親のおリョさんが、たまりかねてふとんをひんめくった。

「目玉がとけてしまうぞ。おっとうはとっくにでていったがね。」

「ひえっ。」

徳松はあわててはね起きる。おいてきぼりをくったのではたまらない。ねぼけまなこでよたよた身づくろいをしていると、

「フフフ……。」

妹のトヨがふとんの中でわらっている。

「にいちゃん。そんなぐあいじゃ、とても一人まえの水主（ふなのり）とはいえんの。満で十四にもなって、まだまだ子どもやわ。」

「おれが？　子どもだと？」

どうしてくれようとふりむいたが、トヨはもう、すっぽりとふとんの中にもぐりこんでいる。もぐりこんでわらっているのだろう、ふとんがこきざみにゆれていた。

「ええい、これでもくらえ。」

えいっとばかりにまくらをなげつけた。くすくすわらいは、しんとして、やんだ。

――ちょっと、きつかったかな。

そう思っていると、トヨはふとんから顔だけをぬっとつきだして、あかんべえと目をむいた。

「よーし。」

徳松はわざと大げさに、両手をあげてみせる。つかみかかるように、からだをすくめてみせた。

「ひゃっ。」

トヨはひめいをあげ、またもひょいとひっこむ。
「なにしとるんよ。」
台所でおリョさんがよんだ。
「う、うん。いまいく。」
「はようせんかい。次郎平さんがきてくれたよ。さっさとたべて——。」
「ホイホイ。わかってまっせ。」
返事をしながら、徳松はちょっと安心する。きちょうめんな次郎平がさそってくれるくらいなら、まだそんなにおそくはないのだ。
あけはなしたおもてのほうから、ひんやりとした海の風が流れこんでいた。そのそとのやみに、ひょろりとした次郎平の影が見えている。
徳松は熱いいもがゆを、ふうふうとふきたてながら、
「次郎ちゃんよ。」

と、声をかけた。
「おう。」
「天気はどうや。」
次郎平はよろめくように、空を見あげ、海を見た。
「そうやのう。いまのところはナギじゃ。」
「ほうかい。ナギかい。そりゃええなあ。」
「けど、ヤマゼがちょいと気になるのう。」
ヤマゼとは、南東からふく海風のことだ。この風が強くなると、雨がくる。ふなのりにはうれしい風ではなかった。
徳松はほとんどいもばかりのかゆを、四はいではしをおく。それから、ゆうべ、ていねいにみがいておいたモリを一本かついで、そとへでた。
「おまちどうさん。」
月はなかった。星明かりの空は、山にかけて半分ほど、雲におおわれている。夜明けまえにしては、なまぬるい南風が、入江のほうから音もなく流れていた。
「ヤマゼか。なあるほど。」
徳松は一人まえの顔をしていう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

次郎平はひょろりと背が高い。顔も長い。が、徳松のほうはもこもこと胸がはっている。まるい顔に、らんぼうにくっつけたようなふといまゆ毛。その下に、いまにもぱあっとわらいだしそうな目が明かるい。

「いったい、いまはなん時ごろよ。」

つるりと顔をなでる。夜のつづきが、まだほっぺたにくっついていた。

どうも自分の顔のようではない。で、ごしごしと力をこめた。

「さっき二番鶏が鳴いたで、かれこれ三時すぎというところかのう。」

次郎平はそういいながら歩きだす。

「三時とはなあ、ねむいこっちゃ。」

すると、うしろで声がした。

「しんぼう、しんぼう。」

トヨがいり口の戸にもたれてはやしたてた。

「一人まえになるための、しんぼうや。」

「はいよ。」

徳松はおそれいる。

「わかりましたよ。だがのう、こんなしんぼうをして海へでていくんだぞ。あとでべんとう持ってくるときは、めしをきっちりつめてくるのをわすれるな。」

「わかってる。」
トヨはうなずいた。それから、
「次郎ちゃん、いっておいで。」
と、いった。声をかけておいて、ひょいと家の中にとびこんだ。どうやら、次郎平に声をかけたくってでてきたのらしい。徳松はひとり、くすっとわらった。次郎平はてれくさいのか、返事もせずにさっさと歩いていく。
浜には、もうたき火がはじまっていた。たき火をめざして、あっちからもこっちからも、男たちがぞろぞろと集まってきていた。みんなモリをかついでいる。クジラ舟にのりこむ男たちだ。
「きょうあたり、えものにありつけようかのう、次郎ちゃん。」
徳松は、黒い海のむこうを見ながらいった。
「なんとか、はようせんことにはなあ。おかゆの中から米つぶがだんだん消えてしまうでよ。」
クジラがとれなくなってから、もうふた月はすぎていた。そのうえ、まもなく正月だ。それなのに、どこの家でもおかゆをすするのが、やっとなのである。
――まだ米つぶがいくらかでもあれば上等だ。おれんとこなんかは、いもばかりだもんなあ。
と、次郎平は思う。けれども、骨ばった手にふうっと息をふっかけながら、彼はだまっていた。
〃ハザシ（モリ打ち）〃というおもい役めの徳松の家にくらべれば、〃山見（クジラの見はり）〃の役である自

分の家のくらしが、ずっと下であるのはいうまでもない。
「毎日毎日いものおかゆばかりじゃ、なあ次郎ちゃん。どかっといっぺんに腹がへって、力がはいらんでなんぎなこっちゃ。」
「ほんまや、きょうあたりひとつ、でっかいやつをみつけてやるか。そのかわり、みつけたいじょうは、しとめてこいよ。」
「よしきた。セミクジラでもマッコウクジラでも、まかしとけ。なにがなんでもひきずってくるわい。そのかわりなあ、山の上でいねむりをしてたらしょうちせんぞ。」
のんびりといいながら、わらっている徳松の目の中に、たき火のほのおがうつって、ゆれた。
「なにいうてんね。舟の上でタコでもつって、あそんでろや。こっちは目のさめるような大物をみつけて知らせてやるからのう。」
次郎平はクジラ舟にのるのではなかった。灯明崎というみさきの先にある、見張り所ではたらいていた。沖をとおるクジラをみつけて、舟に知らせる係りだ。これを〝山見〟という。むろん次郎平ひとりではない。三、四人が交替で、望遠鏡を持って、一日中海を見張る。
「それじゃ、徳ちゃん。夕方にな。」
「おお、夜にはタイマツ持って貝でもひろいにいくか。」
「そうやのう。また、いつかのようなでっかいタコにでもぶつかると、おもしろいがのう。」

半年ほどまえ、あらしの日のつぎの朝だった。二人は棒でかついでくるほどの、タコをしとめたことがあった。波にうちあげられて、いそにぼんやりしているところを、なぐりつけてはこんできたのだ。

「あれはおもしろかった。」

次郎平はわらいながら、みさきへの坂道をのぼっていった。

うしろで、いせいよく、たき火がぱちぱちとはじけていた。そのたびに、男どもの顔が赤鬼のようにてかてか光った。そのうえ、浜辺の砂の上には、ひきあげられたクジラ舟がずらりとならんでいる。どの舟も、赤や青や白のもようを、けばけばしくぬりたててある。そのようすは、すこしばかりきみわるいものだ。

次郎平はぶるっと、小さく身ぶるいする。それから、足をはやめた。だが、なんとなく気になって、ひょいとうしろをふりむいてみた。モリをかついだ徳松が、たき火にもあたらず、じっとこっちを見ていた。なんか用があるのかしらんと思って手をふったが、暗いのでこっちは見えないらしい。きゅうに徳松がたよりなく見えた。

まるで、小さな墓石のように、しょんぼりと立っている。次郎平はぎくっと胸がさわいだ。

あとになって、そのときのことをよく思いだすことがあった。よりによって、徳松が小さな墓石のように見えたことが、どうしてもふしぎでならないのであった。

2．小さなお守り

「どうじゃ、みんなそろうたか。」

玉太夫が男どもの顔を見まわした。どの顔もてらてらと火にあぶられて、赤い。

「さてと――。」

かまきりのように三角の顔をした栄助が、したり顔にキョロキョロした。

「親方、もうひとり松吉のやつがたりませんわい。」

そういいながら、とがったあごをつきだした。

「ふむ。」

松吉にはたいせつなしごとをいいつけてある。こないとなると、予定がくるうのだ。だが、玉太夫はぐずぐずしてはいなかった。くるくるっと、むこうはちまきをしめこんだ。

「よし、しごとだ。」

声につられて、人びとの輪がくずれる。たき火のほのおがめらめらとゆらいで、赤い花のようにとりのこされた。

いよいよ舟出の準備だ。

ゆうべ浜へかつぎあげておいたクジラ舟を、みんなでそうっと持ちあげる。持ちあげて、水にうかべる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com